

今日は聖書講演の前に2点ご案内があります。

1つ目は映画のご紹介。『赦しのちから』。今年イチオシの映画です。試写会に行って来ましたが、聖書のメッセージをそのままに伝えている映画なんですね。しかも押し付けがましくない。宗教臭くない。だれもが安心して見れます。妙なラブシーンもありません。どうぞインターネットで検索し、お近くの映画館に、是非足をお運びいただけますようにご紹介したいと思います。

もう1点。イチオシのYouTubeがあります。私の個人チャンネルで、『ごうちゃんねる』というのを始めております。10分あまりのショートメッセージです。皆様に見ていただけたら本当に励ましになります。どうぞご覧になってください。

さて、今日は「中国古代史に見る聖書の世界観」というテーマでお話したいんです。今日はコロナの話はしません。なんでかというと、飽きたんです。4か月間、口を開けば「コロナコロナ」。もう食傷気味で。今日は、自粛中に読んだ本の中に、特に興味深いと思った事があったので、それを分かち合えたらなと思っています。

日本の作家の中で、私の大好きな作家は司馬遼太郎（しば りょうたろう/1923-1996/T12-H8）です。これはもちろんペンネームで、本名は福田定一（ふくだ ていいち）さん。司馬遼太郎は、中国の歴史家 司馬遷（しば せん）に「遼（はるか）遠く及ばない日本の一男児（太郎）」という事で司馬遼太郎。「私は司馬遷という中国の歴史家の足元にも及びません」というのが、このペンネームの意味です。

彼は歴史小説が一番得意でしたが、その彼が見上げるように尊敬していたのが中国の歴史家 司馬遷。司馬遷（BC145-146?-BC87-86?）は『史記』という歴史書を書いたというのはご存知だと思います。全130巻ですよ。これの大体1/3くらいを、この期間に読みました。もう面白いですね。

司馬遷のお父さん 司馬談（しば たん）も歴史家。歴代帝王の家系を記録する係で、彼にはどうしても実現したい願いがありました。それは「今までの中国の全部の歴史をまとめたい。」しかし、自分には残り時間がない。生まれた息子 司馬遷は天才。記憶力が異様にいいんです。それで、小さい時から歴史文書の調査方法を帝王学で徹底的に叩き込みました。

「お前は一生を使って、中国の一番古い歴史から、今生きている紀元前2世紀の今日に至るまでの、全部の歴史を是非まとめてくれ!」
父親の期待に見事に応えて、司馬遷は漢の武帝（ぶてい/BC156-BC87/在位 BC141-BC87）の時代に歴史家になります。ところが、事件が起こるんです。

漢は匈奴（きょうど）という北方騎馬民族と戦争していました。匈奴は中々強い民族です。漢には李陵（り りょう/?-BC74）という強力な将軍がいました。彼は軍の兵士をあまり付けてもらえず、たった5千人で10万人の匈奴と戦争する。勝てるわけない。ところが、5千人の兵で1万人の損害を与える事が出来たんです。が、李陵自身は、その時に出来るベストを尽くしたけれど捕虜になりました。

「あんな野蛮人の捕虜になったのか！ 漢の将軍が！」「あいつにはプライド無いんか！ あんな、どうしようもない民族の捕虜になって！」と、武帝は口を極めてののしるんですね。

そして「お前らはどう思ってる？」と部下たちに聞きました。部下はね、王様がイエスと言ったらイエスなんです。王様が「カラスは白い」と言ったら白いんです。

だから、「その通りでございます。あいつはもう全然ダメな奴です。」まあ、イエスマン。

司馬遷は歴史家だから、冷静にフェアに分析して、「王様。お言葉でございますが、彼を見限ってしまいますのは、漢の国にとって損失が大きいと思います。彼はよくやったと思います」と庇うんです。

庇った事で「なにっ?! お前、俺に口答えするんか!」。結局、司馬遷は死刑判決を受けます。

ムチャクチャですね、中国って。彼は死んでも死にきれない。まだ、歴史文書『史記』を書き上げてないから。「これを全部書き切るまで、死ぬわけにはいかない!」

王様に嘆願して、死刑の次に重い刑罰に減じてもらいます。それは宦官（かんがん）になるという刑。

すなわち男性性器を切断する。これを腐った刑と書いて腐刑（ふけい）と言います。

切断したところが腐って、いつも臭いを発散したから。

彼はその瞬間に、男なのに男でなくなった。当時の中国の価値観では、人間なのに人間ではない。

それと引き換えにしてでも、「どうしても書かなければならないんだ。中国の歴史を!」

それで一生懸命書いていくんですが、皮肉なものでね、漢の武帝が、歳と共に段々元気がなくなって行くんです。元気がなくなって行くと、内宮（ないきゅう）言わば大奥ですが、中国の絶世の美女たちを侍らしているハーレムみたいな所に入って、もう王様がいるべき宮殿に出て来ない。

ハーレムに出入りできるのは宦官だけ。なので、王から受けた罰によって、いつでも王に会う事が出来る。

王がいる場所にいつでも出入り自由になる。それで、彼は側近中の側近に出世するんです。

その立場を活用しながら、彼の全人生は『史記』の執筆。これを書き終えた数年後にバタッと亡くなる。

エネルギーをこれに使い果たして。

私はその前半部分を読んで、いやあ、ビックリした事がありました。それは、『史記』の古一い歴史の中に書いてある事は、聖書の中で紹介している事と殆ど同じだったんです。

色々ありますが、今日は3つ申し上げたいんですね。

1) 『史記』に頻繁に出てくる言葉に「上帝/じょうてい」があります。これは神の言葉なんです。

“上帝”は上（うへ）の帝（みかど）。天の上におられる帝。これは、神は神でもただの神じゃない。

中国語の神（しん）という言葉は、今私たちが使っている言葉で神（かみ）。

でも、中国語で“神”（しん）と書いた時は、いわゆる山の神・海の神・風の神・雨の神・水害の神、自然神や祖先礼拝の時にも使う神なんですが、“上帝”と書いた時は、そういう神々とは一線を画して次元が違う。全てのものの上に帝として君臨しておられる造物主の事なんです。

上帝には2つのご性質があると古代文書に書いてあるそうです。

① 妙有（みょうう）。“妙”という言葉には「並外れて優れている」という意味があります。

“有”はただ「有る・無い」の有るじゃなくて、「何者にも依存しないで存在する事が出来る」という意味での在る。並外れて優れた存在。あらゆるものとかけ離れて偉大な存在者。在って在る方。在る存在。

② 常在。常に在る。存在しなかった期間が一瞬もないという意味。宇宙だって、存在しなかった期間あつ

たでしょ。ビッグバンと無神論の人たちは言いますが、その前は宇宙はなかったわけです。常に存在しているというのは、存在しなかった事が一瞬もないという存在。

その方は、あらゆるものの上におられる帝であり、そして、並外れて在って在る存在。これが上帝です。

聖書に、ユダヤ人の指導者モーセが神に向かって「あなたのお名前は何かと仰るんですか?」と質問している箇所があります。

出エジプト記 3:13-14

13 モーセは神（造物主）に言った。「今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。」

14 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところへ遣わされた、と。」

「わたしはある」は、ヘブライ語で「エフィエ アシエル エフィエ」。エフィエは在る。アシエルは関係代名詞。だから、在るところの在る者。在って在る者。これが神のお名前。神の本質です。

私たちは在って無いものでしょ? 今日在って、明日どうなるか分からない者。今存在しているけど、ご飯が無かったら・水が無かったら・空気が無かったら・地球が無かったら、存在出来ない。

しかし、在って在る方は、何にも依存せずに常に存在し続けて来られた方。妙有にして常在なる上帝。この言葉の定義は、聖書の説明と完全に合致するのです。

2) 『史記』130 巻の最初の部分に「五帝本紀/ごていほんき」、5 つの帝王の本当の記録（日本書紀の紀）というのが出て来ます。中国の歴史をずーっとさかのぼって行くと、5 人の賢い王様が中国を治めていたと。その中で最初・筆頭が黄帝（こうてい/ BC2510-BC2448）。

夏(か)王朝、次に殷(いん)王朝、そしてズラッと続いていきます。殷は考古学によって歴史的に証明されていて、殷王朝は本当にあったと分かっています。夏王朝はまだ発掘・発見されていない。だけど、限りなく本当にあったであろうと言われている。やがて分かる事になると思います。

五帝本紀は「夏王朝の前に 5 人の立派な帝王が現れる。その最初に出て来るのが黄帝で、彼は中国大陸に登場するありとあらゆる民族の父祖である」と紹介しているのです。

漢民族以外にも、例えば清(しん)という国・『ラストエンペラー』の清は女真族(じょしんぞく)/満州族、ツングース系の民族ですよね。色んな民族がいたけど、どの民族も「私の先祖を辿ると黄帝です。」

秦(しん)の始皇帝(BC259-BC210)ですら、「私の先祖を辿れば黄帝だ。だから私は由緒ある者なのだ。」徳によって中国を治めた偉大な人物 黄帝。

黄帝がどうやって登場したのか中国の神話にあります。「ある時、神が中国の黄色い土を使って、粘土のようにこねて人間の形にした。人間の形をしたその土の中に息を入れると生きものになった。」

これ、聖書を知っている人なら「えっ?! あれか!」あれかって、どれか?

創世記 2:7 神である主は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

これ、そのまんまじゃないですか。つまり、黄帝って誰の事ですか？ アダムです。

中国大陸で活躍した全ての民族のルーツは、この1人の人物だと。

黄帝の成り立ちについては『史記』以外のところに出て来るのですが、『史記』にはこんな事が書いてあるんです。司馬遷は漢民族で、「我々のルーツは中原（ちゅうげん）ではない。」

中国には2本の大きな川が流れていて、北の方が黄河。黄河文明の黄河。

下の方は揚子江。って中華料理屋の名前ちゃいますよ。揚子江。

黄河と揚子江の間に第3の川が流れているんですよ。淮河（わいが）。これがポイントやねん。

この第3の川の北と南で、気候が全く違うんです。北の方は乾燥している気候。南の方は雨が豊か。

なので、北と南の文明は全然違っていて、中国は北と南がくんずほぐれず、合従連衡（がっしょうれんこう）しながら展開して行く。それを全部、紀元前2世紀に至るまでの事をまとめているのが、司馬遷が書いた『史記』。

この本の最初のところで、「中国で活躍する色々な民族のルーツは中原（淮河が流れる黄河と揚子江の間の平原です）ではなく、西の方の高い山々を越えて、東に向かって渡って来た者たちである」と述べているんです。これも聖書を知っている人なら「ああ、あそこか!」

聖書に“バベルの塔”という天文台のような高い塔を建てる記事があります。その工事をやっている時代までは、人類は大陸にまんべんなく散らばって住んでいるんじゃないかと、1か所に住んでいたんやと。それを、神が言葉をばらばらにして東西南北に散らしました。東に向かって散らされたのが中国大陸に渡って来た人たちで、山を越えて、中国大陸の平原に入って行ったんです。

司馬遷はその事を書いているんですね。だから、中国の口伝や色々な記録書を調べると、聖書の記憶を持っている人たち、バベルの塔の記憶を持っている人たちが口伝で聞いて来た創世記初期の記録を、中国古史に書き記して来たという事が分かるんですね。

3) 中国の皇帝たちは、自分が皇帝になると必ず毎年行う事がありました。それは封禪（ほうぜん）。

「封」は傷のない子牛を祭壇に置いて、全焼のいけにえにする事。

「禪」は穀物の初物（はつもの）を祭壇に置いて焼き尽くす事。

『史記』の中に『封禪書』という書物があって、その冒頭に何と書いてあるか。

「今まで天命を受けて帝王になった者たちの中で、封禪をしなかった者がただの1人でもいるだろうか。」（いないよね）という内容。秦の始皇帝まで72人の帝王が現れるんですが、72人全員が封禪をやっているんですよ。秦の始皇帝、キングダムですよ。中国を統一した人。統一した時、始皇帝自身も封禪をして、天の上帝に「統一致しました」と報告してるんです。

北京の天壇（てんだん）公園に行って来ました。明（みん）の時代に造られた天壇という祭壇があります。高さ38m。25本の柱で支えられている祭壇で、中国史上最大の祭壇です。

祭壇は動物を焼き尽くす場所ですよ。動物をいけにえとして上帝に献げる場所。

天壇公園の天壇、今でも見学する事が出来ます。

封禪は1911年まで続いて1912年になくなりました。

何で？ 辛亥（しんがい）革命（1911-1912）があったからですよ。孫文（そんぶん/1866-1925）。

1911年までは清のラストエンペラーがおったんです。ラストエンペラーは封禪やりました。

ところで、封禪の動物のいけにえと作物を献げるという習慣ですが、

出エジプト記 40:29 会見の天幕である幕屋の入り口に全焼のささげ物の祭壇を置き、その上に全焼のささげ物と穀物のささげ物を献げた。主がモーセに命じられたとおりである。

これです。20世紀の頭まで、歴代中国の帝王や皇帝たちは封禪を続けて来た。

封禪とはささげ物である。誰に献げるのか？ 上帝です。

29節は誰の命令か？ 主がモーセに命じられたとおりである。この主が上帝です。

聖書では、この世界の第一原因者・全てのものの造り主の事を、ヘブライ語で「ヤーウェ」、「エフィエ アシェル エフィエ」と言い、中国語では「上帝」と言っていて、同じ方を指しているんです。

私たちは聖書のお話を聞くと「それって、西洋のもんでしょ。」「それって、中東の本でしょ。」「外国の宗教でしょ。」私たち関係ない!と思いがち。だけど皆さん、人間はずっと元を辿って行くと、ルーツ・根っこは同じ。日本人も中国人もユダヤ人もヨーロッパの人たちも、ずっとさかのぼって行くと、セム・ハム・ヤペテ・ノアまで行くんですよ。

人間を造った神は唯一の神です。唯一の神に国境はありません。日本には日本の神・ユダヤにはユダヤの神・アメリカにはアメリカの神、そうじゃない。私たちの造り主は唯一だからです。

なので、聖書の神はハッキリ言って日本人の神ですよ。

私たちの極々近い先祖は「創造主？ そんなん関係ない。我々には我々の神」と言うかも知れないけど、日本人のルーツをずっと辿って、日本人の1番のご先祖は創造主を信じてたんです。

日本人のご先祖が大切にしていた創造主を信頼し、大切にするという事は、ご先祖への裏切りどころか、原点に返るという事ではありませんか？ 創造主を信じる・聖書の神を信じるというのは、日本の文化に合致しない事ではなく日本文化の原点ですよ。これが聖書が語っている事なんですね。

残りの時間は「聖書が神と言う時は、人が作った神ではなく、人をお造りになった神だ」という事を頭に入れながら、聖書のメッセージを聞いていただきたいんです。

マルコ 10:45 人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。

人の子はイエス・キリスト、救い主、メシアの称号です。

直訳すると人間の子という事ですが、これは称号の意味があって、救い主は人の子と呼ばれるんです。

だから、イエス・キリストが人の子と名乗ると「わたしは救い主だ」と自己主張しているのと同じです。

その自己主張している救い主が来られた理由が2つ紹介されています。

①仕えられるためではなく仕えるために来た。

仕えるというのは奴隷の仕事をするという意味です。キリストは神なのに、へりくだってしもべとなり、奴隷のようになって人間に仕えた。なぜ、そのようにされたんでしょう？

それだけが、神から離れて行く人間の心を勝ち取る唯一の誠意ある道だからです。

キリストが神の力を見せびらかして、つまり脅迫して「わたしの所に来い」と言ったら行くかもしれないけど、そんな脅しや恐怖でコントロールする関係の中に、本当の人格的な交流や愛は育ちません。

恐れのあるところには愛が無い。愛があるところには恐れが無い。

なのでキリストは、神としての力を見せびらかして人間を震え上がらせて招くのではなく、へりくだり仕える者の姿をとって来られたのです。

②多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来た。

贖いの代価とは、奴隷を自由にするために支払われる代金の事。

「別に、奴隷ちゃうけど。」いや、罪と死の奴隷じゃないか。と聖書は言うんですね。

私たちを罪と死の奴隷状態から自由にするために、キリストは贖いの代金を自分のいのちで払ってくださった。

今、欧米で人種差別問題がえらい事になってますね。今年11月、アメリカの大統領選挙があります。私はトランプ大統領を応援していますが、今の世論調査の支持率を見ると、現職トランプ大統領を民主党バイデンが追い抜いているんですよ。

5月下旬ミネアポリスで黒人のジョージ・フロイドさんが、白人警官に首を膝で押さえつけられて亡くなりました。ジョージ・フロイドさんにはたくさんの前科があって、ある家に押し入って、妊婦さんに銃を突き付けて強盗を働こうとしたとか色々あるんです。

でも前科があるからといって、死なせるような酷い事をするのはもちろん論外です。

これがきっかけとなって、全米で暴動が起こり、ヨーロッパに飛び火し、イギリスでは奴隷売買に関係した歴史的人物の銅像が倒されたり海に捨てられたりして、えらい騒ぎになっている。

非常に根が深い問題ですよ。

奴隷解放を、また差別問題を考える時、私は1つ思い浮かぶ小説があります。

『アンクル・トムの小屋』（1852年）。これは南北戦争（1861-1865）の10年前にストウ夫人が書きました。

ストウ夫人はクリスチャン。ご主人は牧師。ご主人のお父さんも牧師。ストウ夫人の実のお父さんも牧師。クリスチャン一家。

彼女は北部にいたのですが、苦役に耐えかねた逃亡奴隷が南部からいっぱい出て来る。彼らを秘密列車に乗せて、カナダに秘かに送り込むという秘密結社があって、彼女はその正式メンバーでした。

命辛々南部からやって来る逃亡奴隷たちから、どんな酷い目に遭って来たのか、生々しい証言を受けるのですが、それがエピソードとなって、この本の中にふんだんに盛り込まれてる。だから、すごい迫力があります。これが奴隷解放運動の起爆剤として、非常に大きく用いられる事になるんです。

アンクル・トム。アンクルはおじさん。アンクル・トムは黒人奴隷の中年おじさんで、「トムじいさん・トムおじさん・トムじい」みたいなニックネームのような感じ。頭が良くて、心優しくて、とても我慢強い。そして力持ちで器用で。ほんとに非の打ち所のないような人格で描かれています。

特に彼はすごく信仰深い。この小説にアンクル・トムの短い祈りが出て来て、それは子供みたいな祈りなんです。読んでるだけでグサッ!グサッ!グサッ!刺さります。

「ああ!創造主を信頼するって、こういう事なのか!」を、具体例で見せつけられてしまうような祈り。

初めは悪態ついているんです。「神なんか、いらん!」奥さんも奴隷でクローといいます。

彼女の感化を受けながら、キリストの話を聞きながら、どんどん心が柔らかくなって、とうとうイエス・キリストを自分の救い主と信じるんです。

なぜ信じるかというと、イエス・キリストは神なのに、どんな奴隷よりも奴隷になられた。

神なのに、かしくかれるためではなく、仕えられるためではなく仕えるために、そして命までも与えるために来られたという事が入った時、分かった時、「奴隷の俺の気持ち分かるのは、ナザレのイエスしかない。」この方を救い主として受け入れました。

アंकル・トムが仕えていたのはシェルビーという白人の主人です。トムに仕事を任せると、全部上手いこと行くんですよ。肉体労働・折衝・奴隷同士のトラブルの解決、とにかく「トム、頼むぞ」と任せたら、全部上手いこと行く。あまりにも上手く行くので、信頼できるからと、遂に会計の帳簿まで、お金の計算の事まで彼に任せるんです。

トムの機転で、シェルビーは何度も何度も窮地を脱する事が出来た。トムは命の恩人なんですよ。奴隷だけど、トムがいなかったらとっくにダメになっている。だから、身分の違いはあるけど友達みたい。

しかし、シェルビーが事業で大失敗して、返しきれないような借金を背負ってしまい、借金返済のために財産処分するのですが、その中にトムがいたのです。すごい有能。つまり、高く売れる。

トムは家庭を持っています。だけど、ちょっとでもたくさんお金をもらおうと思って、シェルビーは家族をばら売りにするんですよ。家族がばらばらになって、それぞれ連絡取れなくなる。

「お前を売ることにした。」それが分かった時、シェルビーがいなくなった所で、妻のクローが「なに?! あなたのお陰で、あの人 2 回も命拾いしているのよ。自分が借金で困ったら、いの一番であなたを売って。あの人いい人だと思ってたけど、とんだ見込み違いだった! トム、逃げよう。次がどんな主人かわからない。ここにいてたら、どんな恐ろしい事が起こるか分からないから、さあ、逃げよう!」

トムは静かに「逃げない。クロー、お前は俺を愛しているかい?」「ええ、もちろんよ。」
「ほんとに愛してくれているなら 1 つ頼みがある。俺の前で、あの方の悪口を言うのをやめてくれ。俺はあの方が好きなんだ。あの方の悪口はひと言でも耳に入れたくない。だから、あの方を悪く言うのはやめてくれ。俺は残るよ。だって、ここで逃げたら、あの方の借金返済はどうなる? あの方が借金の苦しみから逃れる事が出来るのなら、俺は奴隷として売られて行くよ。」

そこが地獄の 1 丁目です。そこからもう…、本当に聞いた事を基にした話なので、えげつない展開が待っているんです。トムは転売、転売、転売で、新しい主人に売りつけられるたびに、前の環境よりもっと悪く・もっと酷く・もっと辛いという、どんどん駄目になって行って、最終的には、南部の綿花畑の所に売り飛ばされて行きます。

炎天下、一日中綿花を摘むのですが、あまりの暑さで水分がなくなってバタッと倒れたら、トゲの付いた棒で頭をビシッと殴られる。皆死にたくないから必死に綿花を摘んでいるのですが、ふと見ると、女奴隷が熱射病で倒れている。リンチが始まる。

そこでアंकル・トムが、自分が摘んだ綿花を彼女の籠にそっと分けるんですね。

それを見た主人が「お前、なに勝手な事やってんねん! この女奴隷は怠け者で、今さぼってるんだ!」

そして鞭を渡して「お前が俺の代わりに罰を与えろ。思いっ切り打て!」「打てません。」「なぜだ?」「それは正しくないからです。」「正しいか正しくないか関係ない。主人の命令に従うのが奴隷だ。俺はお前を金で買った。だから命令を聞け!」

「確かに私の体はあなたに買われたけど、私の心はあなたに買われてない。私の心は誰も買う事は出来ない。私の心・精神・魂は救い主イエス・キリストが贖ったから。だから、誰も私を傷つける事は出来ない。救い主が私の王だから。」

ある時、酷い目に遭わされている奴隷たちが限界に達します。この主人にお酒をいっぱい飲ませ、揺さぶってもどうしても絶対に起きないというところまでぐでんぐでんに酔っ払った主人の足下に斧がある。「その斧を振り上げて、頭をかち割って逃げよう。トム、協力してくれ。」

ところがアングル・トムは「悪から善は生まれぬ。この主人は明らかに間違っている。彼がやっているのは悪だ。彼は差別主義者でとんでもない奴だ。だからといって、暴力でこの人を殺すのは悪だ。悪から善は生まれぬ。」「じゃあ、どうするんだ?!」「私が彼のために祈る。」「バカバカしい!」そして集団逃亡するんですが、トムはまた残るんです。

酔いから醒めた主人が「お前が逃がしたんだな! 主人に逆らったらどんな酷い目に遭うか、思い知らせてやる!」屈強な2人の奴隷をアングル・トムの左右に立たせて、失神するまで殴り続ける。「もっと殴れ。もっと!もっと!」。失神したら水ぶっかけて。また失神したらまたぶっかけて。それが基で、アングル・トムは亡くなるんです。

トムが亡くなる前、殴った2人の奴隷が来て「赦してくれ。したくなかった…。だけど、主人を怒らせるのが怖かった。俺はしたくない事をしている罪の奴隷だ。赦してくれー。」トムは「何とも思っていないぞ。」「こんな事されて、あんたにそんな事を言わせるイエス・キリストって、一体誰なんですか?」アングル・トムは最後の力を振り絞って個人伝道するんです。

「キリストは仕えられるためではなく仕えるために、俺たちのように奴隷としてやって来た救い主だ。王なのに奴隷のようになって、十字架にかかって、俺が本来受けなければならない罪の罰を全部、キリストがああ十字架の上で背負ってくれたんだ。キリストは十字架でご自分の命を神に差し出して、俺たちを自由にしてくださったんだ。」

2人ともイエス・キリストを信じます。キリストの左右に強盗がかけられるというモチーフを使って、この話を終えるのが『アングル・トムの小屋』。仕えられるためではなく仕えるために来た。

私たちは悪口を言われて当然の事をいっぱいして来た者ですが、キリストは私たちへの悪口を聞きたくないと思っています。私たちに誰からの非難も受けさせたくないと思っています。ちょうどアングル・トムが「主人の悪口を言わないでくれ。私には大事な人だから聞きたくない。」

私たちの過去にどんな事があったか全部知っている。悪魔にさえも私たちに訴えさせたくない。黙らせたい。私たちの罪を訴える者の口を完全に封じるために、キリストは1度死んでくださった。死んでくださっただけでなく、3日目によみがえってくださった。死んでよみがえったキリストだけが、私たちに罪と死から解放する事が出来る救い主です。

いかかでしょう。

あなたのために来られた救い主。そして、間もなくお越しになる救い主。イエス・キリスト。是非、この方を信じてください。救われます。心からお勧めします。

~~~~~

\* 動画は YouTube で「HCA 東住吉キリスト集会」

\* ラジオ番組「聖書と福音」(約14分)も是非どうぞ。YouTube もあります。

\* YouTube 「ごうちゃんねる」(約10分)もぜひ見てください。

動画筆記 : Rumi

